

平成30年度スポーツ庁委託事業

「Special プロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」

## 成果報告書

弘 前 大 学

平成31年3月

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、弘前大学が実施した平成31年度「Specialプロジェクト2020（特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

## 1 事業趣旨

2020年には東京パラリンピック競技大会が開催され、また新たな特別支援教育に対応するため学習指導要領の改訂もされるなど、障害者スポーツの推進は喫緊の課題となっている。

現在、障害のある子供たちが、継続的にスポーツ活動を実施できる環境が整っていない状況であるが、特に青森県においては、障害児・者が継続的にスポーツ活動を実践できる環境が十分な状況ではない。

本状況を踏まえ、本学と教育学部附属特別支援学校（以下「附属特別支援学校」という。）は、平成28年度から29年度までの2年間をかけて、特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業に取り組んできた。

事業を進めるにあたり、1年目は、「児童生徒・保護者・指導者・支援者みんな一緒にスポーツ実践」と「情報発信」の二つの重点項目を決めて取り組んだ。その結果、スポーツを媒介として障害のある人もない人も自然体で心を通わせながら一緒に活動に取り組み、スポーツへの興味や関心を高めることができ、人と人とを結び付けるスポーツの力の大きさと、今後の共生社会の形成に向けたスポーツの可能性を見いだすことができた。

2年目は、障害児・者がスポーツを楽しめるスポーツ教室の開催等を通し、障害児・者や関係者のみならず地域の人々の障害者スポーツへの意識や視野の広がりを目指すとともに、障害者スポーツ振興の地域拠点となることを目指した活動に取り組んできた。その結果、特別支援学校等を有効に活用したスポーツ教室の継続的实施への需要があることが分かった。

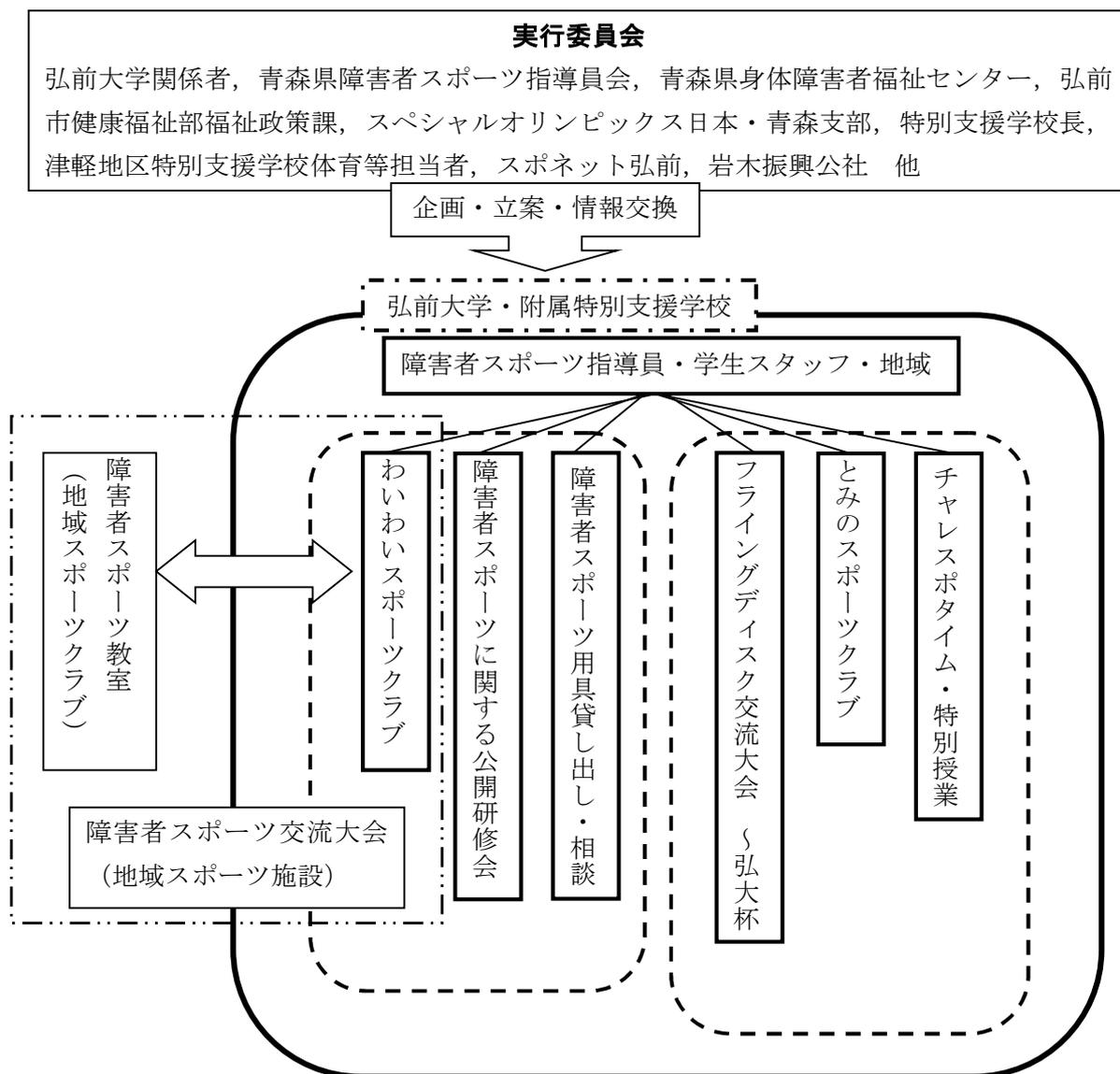
しかし、この需要に対応するため、本学と附属特別支援学校が開催した、学校に在籍している児童生徒を対象としたスポーツ教室のみでは障害児・者が継続的にスポーツを実施するための環境が十分に整っているとは言えない状況である。

これらの状況から新たな課題として、学校に在籍している児童生徒を対象とした、本学と附属特別支援学校が開催するスポーツ教室と、障害者（成人）を対象とした、地域スポーツクラブやスポーツ施設等との地域連携の必要性が明確となった。

この新たな課題に対応するため、本事業では、本学と附属特別支援学校が、地域との連携を通して、成人した障害者も対象として、障害児・者が継続的にスポーツに取り組める環境作りを行い、「弘前大学モデル」と称した、障害者スポーツ振興の地域連携モデルの構築を目指す。併せて、これまでの2年間の取組を繋げ、「ほんもの」のスポーツに触れる機会を通して、障害者スポーツにおける競技力の向上を目指す。

本事業は、特別支援学校等を有効に活用した実践的な研究を通して、地域における障害者スポーツの更なる拠点づくりを図ることにつながるものである。

## 2 事業実施体制



## 3 活動方針

2年間のスポーツ庁委託事業を受けて、新たな課題として明確になった、学校に在籍している児童生徒を対象とした、本学と附属特別支援学校が開催するスポーツ教室と、障害者（成人）を対象とした、地域スポーツクラブやスポーツ施設等との地域連携を通して、障害児・者が生涯継続的にスポーツに取り組める環境の必要性に重点を置き、「弘前大学モデル」と称した障害者スポーツ振興の地域連携モデルを構築する。

## 4 事業内容

### (1) 実行委員会

#### ア 目的

幅広いスポーツ経験を通して、スポーツの基盤をつくり、地域における障害者スポーツの拠点づくりに繋げるために、地域が連携したスポーツ教室の開催についての実施方法や内容、更に、大学及び特別支援学校における、将来有望なアスリートの発掘・育成のための、合同部活動及びスポーツ大会等の計画立案及び実施について検討する。

#### イ 期 日

第1回目	平成30年5月31日(木)	13:30~15:30
第2回目	平成31年1月9日(水)	13:30~15:30

ウ 構成委員 青森県障害者スポーツ指導員会会長，青森県身体障害者福祉センター所長，弘前市健康福祉部福祉政策課，スペシャルオリンピックス日本・青森，スポネット弘前，岩木振興公社，青森県立特別支援学校校長，津軽地区特別支援学校担当者，弘前大学教育学部及び附属特別支援学校（事務局）

エ 実行委員会案件

第1回

- ・平成30年度スポーツ庁委託事業「Specialプロジェクト2020」概要説明
- ・「平成30年度フライングディスク交流大会～弘大杯～」実施計画検討
- ・「弘前大学モデル」計画検討
- ・各地区特別支援学校でのスポーツの振興について 他

第2回

- ・平成30年度スポーツ庁委託事業「Specialプロジェクト2020」活動報告
- ・「弘前大学モデル」活動報告と次年度へ向けて
- ・スポーツ活動今後の方向性（付録1）

オ 成果と課題

実行委員会では，地域における障害者スポーツの拠点づくりに繋げるための意見交換の場として，地域の関係者が集まり検討した。また，活発な意見交換が行われ，強いネットワークが構築された。委員のメンバーは，スポーツ活動に参加する機会が増えたことで，地域のスポーツ活動の一体感が高まったと感じていた。今後は，3年間の取組から見えていき課題の解決，更なるスポーツ振興に向け，検討していく必要がある。



(2) 実践研究の取組内容

ア 目的

- ・「たのしい」スポーツ経験の拡大を図り，障害者スポーツ指導員による，スポーツ教室実施の基盤づくりと地域の拠点づくりを促進する。
- ・子供たちが「ほんもの」のスポーツに触れる機会を通して，目標を高く抱くことに繋げ，スポーツイベント参加の促進を図るとともに，アスリートの発掘及び育成を目指す。

イ 取組内容

①特別支援学校等を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

a 「弘前大学モデル」(付録2)

(a) わいわいスポーツクラブ

期日	回目	平成30年	6月23日(土)	10:00~12:00
	2回目	平成30年	7月30日(月)	10:00~12:00
	3回目	平成30年	8月8日(水)	10:00~12:00
	4回目	平成30年	11月17日(土)	13:30~15:30
	5回目	平成30年	11月23日(金祝)	13:30~15:30
	6回目	平成30年	12月27日(木)	10:00~11:30
	7回目	平成31年	1月11日(金)	10:00~12:00
	8回目	平成31年	2月2日(土)	13:30~15:30

会場 弘前大学教育学部附属特別支援学校体育館

内容・講師 1回目フライングディスク・福沢和彦（県障害者フライングディスク協会）  
2回目ボッチャ・中嶋実樹（弘前大学教育学部附属特別支援学校教諭）  
3回目ボッチャ・中嶋実樹（弘前大学教育学部附属特別支援学校教諭）  
4回目バスケットボール・本間正行（弘前大学教育学部学部長講師）  
5回目バスケットボール・益川満治（弘前大学教育学部講師）

6回目スポーツチャンバラ・増田貴人（弘前大学教育学部准教授）

7回目フライングディスク・齋藤誠（県障害者フライングディスク協会）

8回目バスケットボール・本間正行（弘前大学教育学部学部長講師）

参加者 1回目 参加者14人，学生スタッフ 0人，本校職員14人  
2回目 参加者21人，学生スタッフ 2人，本校職員 9人  
3回目 参加者36人，学生スタッフ 3人，本校職員11人  
4回目 参加者10人，学生スタッフ20人，本校職員 9人  
5回目 参加者23人，学生スタッフ20人，本校職員 9人  
6回目 参加者28人，学生スタッフ 2人，本校職員14人  
7回目 参加者29人，学生スタッフ 0人，本校職員13人  
8回目 参加者10人，学生スタッフ20人，本校職員 6人

#### 参加者の声

- ・早く行きたいというアピールがとても強く，こんなにバスケが好きになるとはと驚いている。とても楽しそうにされていて嬉しく思った。
- ・広い場所で，色々なスポーツの体験ができる機会があつて嬉しい。
- ・体を動かせる活動の中で，ルールを覚えながら出来るスポーツで，子どもが参加しやすいと思う。
- ・たくさんの人と触れあい，コミュニケーションの場になっていて良いと思った。
- ・回数がもっと増えたら嬉しい。
- ・障害があつても継続してスポーツができる場があつて嬉しい。
- ・身体が不自由でも運動ができる機会があり，リフレッシュできる。体力向上とともに精神的なリフレッシュができる，様々な取り組みに期待している。
- ・地域や普段接することがない子どもたち，健常者との交流をさせたい。
- ・一生続けられる趣味を見つけるきっかけや，体力作り等，楽しく過ごせる場があるのがありがたい。
- ・待つ，覚える，守る，実践する，あいさつ，楽しむ。スポーツをしながら社会性を身に付けることが出来るのが良い。

#### 成果と課題

附属特別支援学校が，わいわいスポーツクラブを通して，障害のある子供たちが，気軽に参加できるスポーツの場の提供をすることで，スポーツに触れる機会を多くもつことができた。本校は，ができた。また，生涯を通してスポーツができる環境を構築するため，今後は，スポーツ指導員や学生との更なる連携や，弘前大学モデルの情報発信に力を入れていく必要がある。また，保護者から，「健常児との交流がしたい」との声が聞かれたため，次年度は，障害のある子供と健常児と一緒にスポーツを行うことを検討することになった。



## イ 障害者スポーツに関する公開研修会

(ア) 期日 平成30年8月1日(水) 講演1, 2 10:00~12:30  
 実技1 13:30~16:00  
 平成30年8月2日(木) 実技2 9:00~12:00  
 実技3 13:00~15:00

(イ) 会場 弘前大学教育学部附属特別支援学校 図書室, 体育館

(ウ) 講演1 「第2期スポーツ基本計画と障がい者スポーツの現状と課題」  
 ～特別支援学校等を拠点とした障がい者の地域スポーツの普及・振興～

講師 水原由明(日本障害者スポーツ協会 スポーツ推進部長)

講演2 「全国障害者スポーツ大会の目的と意義」

～2025年青森大会への取組～

講師 福沢和彦(青森県障害者スポーツ指導員会会長)

実技1 「ボッチャ競技を通じたスポーツ活動について」

講師 水原 由明氏, 福沢 和彦氏

実技2 「フライングディスクを通して得る楽しみ」

講師 中嶋実樹(弘前大学教育学部附属特別支援学校教諭)

実技3 「視覚障害者のスポーツ～ゴールボール～」

講師 一戸 太陽氏 他3名(青森県立盲学校職員)

(エ) 参加者 延べ98名(県内特別支援学校教員, 近隣の関係施設等)

(オ) 参加者の声

- ・学校というより, 地域の資源を活用していくということがピックアップされていて, スポーツに限らず, 今後特別支援学校に求められることだとも感じた。
- ・障害者スポーツを通して, 多くの方が「生きがい」を感じることができると感じた。その反面, 支援のあり方や現状など難しい一面があることも分かった。
- ・ボランティアの重要性を感じる。特別支援, 障害に関わる, 興味のある人だけの壁のある社会ではなく, それを越えた社会に魅力や楽しさを伝える努力が必要で, ボランティアをうまく活用できる方法を探したい。

(カ) 成果と課題

障害者スポーツにおける, 現状と課題, それぞれの立場での役割等について確認することができた。また, 実技研修を通して, 指導方法等を学ぶ

機会となり、今後の障害者スポーツの広がり期待できると感じた。



ウ 障害者スポーツ用具の貸出・相談

(ア) 期日 7月～10月

(イ) 内容 スポーツ用具の貸し出し  
(フライングディスク用具, ボッチャ, 卓球バレー 等)

(ウ) 件数 6件

(エ) 貸出先 県内特別支援学校, 岩木山総合運動公園  
弘前市スポーツイベント

(オ) 成果と課題

用具の貸出を行うことにより、障害者スポーツの経験の場が広がったという声が聞こえた。また、近隣の特別支援学校に限らず、地域のスポーツイベント等にも用具借用の場が広がってきている。用具借用の場の広がり、スポーツ経験の広がりにも繋がることを示唆される。また、スポーツに関する相談から、障害者スポーツ指導員会への橋渡し等を通して、地域の学校とスポーツ機関との繋がりが強化された。

②特別支援学校等における体育・運動部活動等の推進

ア 第2回フライングディスク交流大会～弘大杯～

(ア) 日時 平成30年7月7日(土) 9:00～11:50

(イ) 会場 弘前大学第一体育館

(ウ) 参加者 選手108名

(本校児童生徒53名, 県内特別支援学校55名)

(エ) 日程 9:20～9:35 開会式

9:40～10:20 講習会

10:30～11:40 競技

11:40～11:50 閉会式

(オ) 競技種目 アキュラシー競技

(カ) 表彰 参加者全員に記録証を授与  
各組3位までメダルを授与

(キ) 参加費 無料

(ク) 参加者の声

- ・スタッフや審判が盛り上げてくれるので、入る枚数が少なくても楽しめた。運動が得意でなくてもできる競技だと思うので続けてほしいと思う。
- ・前回に比べ、他校からの参加が多く見られたように思う。続けることが意味をなしてくると思うので、来年度もよろしく願いしたい。
- ・落ち着いて参加できた。終わったあともあまり疲れはなかった。一つ一つステップアップして参加していると思う。勝つことよりも集中して楽しく

スポーツできたらと思っている。

- ・活気があり，雰囲気もよい。ぜひ続けてほしい。
- ・とても和やかな雰囲気です。みんなが楽しめたと思った。年1回でなくそれ以上に開催してもらいたいです。
- ・子供たちが競技をしている姿を見るのは，とても楽しかったです。知っている子には，声援を送り，喜んだり悔しがったりする様子と一緒に，気持ちが動きました。

#### (ケ) 成果と課題

競技のルールをシンプルにし，初めての参加者でも気軽に競技を楽しむため，経験者も記録の向上を目指して参加したりすることができる点が多かった。また，昨年度に引き続きフライングディスク協会指導員や学生協力員など外部の人材と連携して運営することができた。加えて，参加者や保護者から継続して欲しいという声が昨年度と同様に聞かれたが，今年度は，運営側でも継続していきたいという声が増えてきた。大会を重ねることで，交流大会の意図の理解が深まったと考える。



#### イ とみのスポーツクラブ

(ア) 期日 平成30年度7～8月 火曜日及び木曜日

15:00～15:30

合同練習会 8月9日(木)，8月16日(木)

14:00～15:30

第26回青森県障害者スポーツ大会出場 8月26日(日)

(イ) 回数 13回実施(合同練習会2回含)

(ウ) 会場 特別支援学校グラウンド，弘前市営陸上競技場

(エ) メンバー 附属特別支援学校12名

津軽地区特別支援学校11名

(オ) 内容 ・青森県障害者スポーツ大会に向けての練習

・種目は，陸上競技及びフライングディスク

・青森県障害者スポーツ大会出場

#### (カ) 成果と課題

とみのスポーツクラブの参加者は，それぞれが大会に向けて明確な目標をもち，達成しようと努力して練習に取り組んだことで，競技力の向上に繋がり，競技スポーツへ意識の高まりを感じた。また，大会への参加を通して，スポーツ経験の拡大に繋がったと考える。また，合同練習会への参加も少しずつではあるが増えてきている。



### ウ チャレスポタイム

(ア) 著名選手による特別授業「やってみよう！バスケットボール教室」

日時 平成30年10月17日（水）9：00～11：15

場所 弘前大学第一体育館

講師 プロバスケットボール選手3名（青森 WAT' S）

対象 本校児童生徒

内容 バスケットボールデモンストレーション

バスケットボール教室

質問タイム

成果 体験したことのない、知らなかったスポーツを見たり体験したりする機会として、児童生徒にとっては勿論のこと、教員や保護者にとっても、とても、良い刺激とまり、良い教室となった。チャレスポタイムの目的である「ほんもの」のスポーツを身近に感じる機会になった。また、この教室を機会に、バスケットボールをやりたいという生徒が増え、休み時間に自らバスケットボールを練習する姿が見られたことも大きな成果といえる。



### (イ) 外部講師による授業の実施

日時 2月 各グループ1～2回実施

場所 本校体育館，グラウンド 他

グループ・回数・講師

「クロスカントリースキー」グループ・・・2回実施

講師：齋藤秀美氏

（日本ノルディックフィットネス協会アクティビティインストラクター）

木田康夫氏

(日本ノルディックフィットネス協会アクティブインストラクター)

「ニュースポーツ (ボッチャ)」グループ・・・1回実施

講師：福沢和彦氏 (青森県障害者スポーツ指導員会会長)

「ダンス」グループ・・・2回実施

講師：大湯博美氏 (青森県エアロビクス連盟)

「ボール」グループ・・・2回実施

講師：市川友一氏 (青森県サッカー協会)

斎藤 準氏 (青森県サッカー協会)

中川俊之氏 (青森県サッカー協会)

成果 外部の専門家を講師に招いて授業を行ったことで、より競技スポーツを意識した専門的な指導を受けることができた。それにより、児童生徒の目標設定も高くなり、より高度なレベルで競技スポーツを学ぶ機会となった。教員たちも、外部講師から、より専門的な指導方法を学ぶことができ、教員の指導力向上にも繋がったと考える。

### (3) 評価指標

ア 特別支援学校等を拠点とした障害児・者の地域スポーツクラブ活動の推進

(ア) 「わいわいスポーツクラブ」に継続参加の人数

[平成29年度]

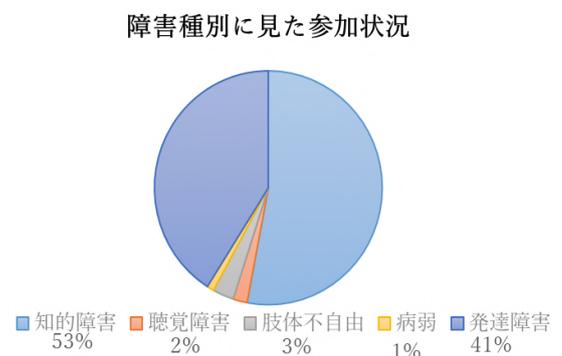
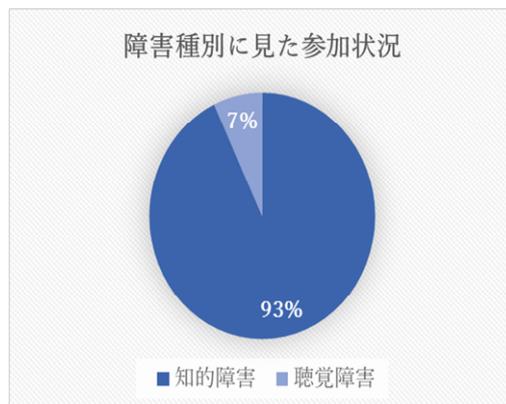
46人 (延べ人数55人)

2回以上の参加者：17%

[平成30年度]

88人 (延べ人数142人)

2回以上の参加者：39%



## (イ) フライングディスク交流大会

[平成28年度]

参加者：91名

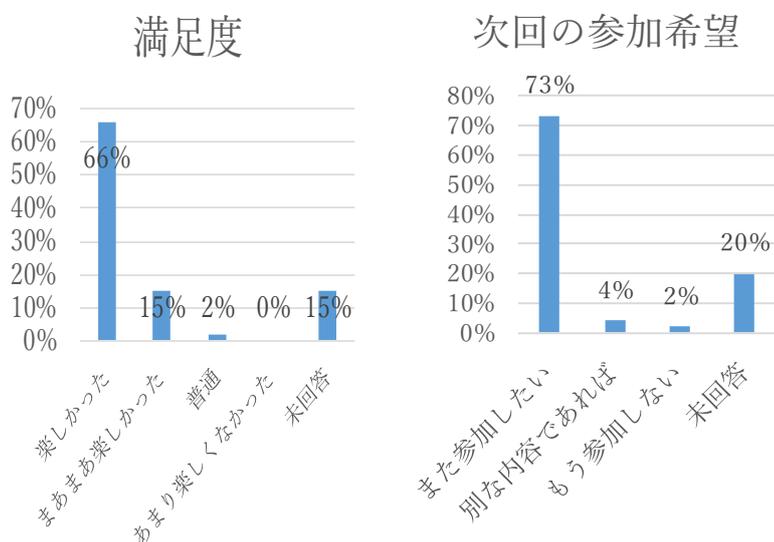
[平成29年度]

参加者：73名

[平成30年度]

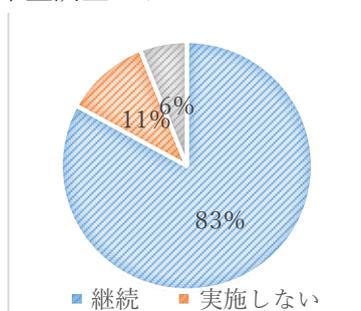
参加者：108名

[平成30年度 参加者アンケートより]



[本校職員の意向]

次年度の方向性についての  
希望調査より



- ・子供たちは楽しみにしていて楽しそうな姿が見られた。また、他校の方とも交流が図りやすい種目だと思う。
- ・本校として県立と違う特色を！
- ・今後益々大会の意義は大きくなると思う。
- ・当日の交流大会に向けて、練習の時から子供達が生き生きしていた。目標に向かって取り組む良い機会なので、次年度もあると良いと思った。
- ・毎年、全校で参加して、フライングディスク大会を行う必要がない。希望者のみ参加にして良いと思う。

## 5 事業成果

### (1) 事業成果

本事業の実行委員会により、地域における障害者スポーツ振興に向け強いネットワークが構築された。また、実行委員のスポーツイベントへ実際に足を運ぶ機会が増えたことで、地域のスポーツ活動に一体感が高まった。実行委員が連携してスポーツ活動を行った中で四つの成果を実感している。

一つ目は、障害児者に多種目のスポーツを経験する機会を設定するため、「フライングディスク交流大会」や「わいわいスポーツクラブ」を地域のスポーツ指導員や大学職員、学生の協力により実施した結果、地域住民の障害者スポーツに対する視野が広がるとともにスポーツ活動に参加する人数が増えてきたことである。

二つ目は、気軽に参加できるスポーツの場として、学齢期は附属特別支援学校の「わいわいスポーツクラブ」、成人は地域スポーツクラブによる「障害者スポーツ教室」、更には地域のスポーツ施設における「障害者スポーツ交流大会」と障害児者が継続的にスポーツに取り組める環境「弘前大学モデル」が構築されたことである。

三つ目は、「チャレスポタイム」の特別授業や「フライングディスク交流大会」を通して、附属特別支援学校児童生徒のスポーツに対する興味関心と意欲の向上に繋がったことである。また、「チャレスポタイム」の外部講師による授業の実施や研修会を通して、障害の状況に応じたきめ細やかな指導や、本物の競技スポーツに触れる機会を設定したことにより、指導者にとっても専門的な知識を得るとともに今後の競技スポーツの発展に繋がるきっかけとなったことである。

四つ目は、3年間の事業を経て、初めて参加者や保護者から、「健常児との交流をやりたい」という声が聞こえてきたことである。健常児との交流活動の場の少ない弘前地区にとって大きな成果と思われる。

上記のことから、本事業の実施に伴い、地域の障害児者に関わる関係者の連携が深まり、障害者スポーツの更なる拠点づくりに繋がったことが実感できた。

## (2) 既存事業・体制と本事業との関係

平成28年度「特別支援学校等を活用した障害児・者のスポーツ活動実践事業」を通して、障害者スポーツを支える人材の育成を含め、それぞれの役割で参加する障害者スポーツへの広がりや可能性を感じとることができた。

平成29年度は、「Special プロジェクト2020」の実施により、障害者スポーツ振興の地域の拠点となるための取組を通して、スポーツ教室の必要性を感じるとともに、地域と連携して取り組む方向性が見えた。また、参加者は色々なスポーツを経験することができたことで、興味・関心の幅が更に広がった。

平成30年度は、上述したとおり、「Special プロジェクト2020」の実施に伴い、地域の関係者が連携し、障害児者が継続的にスポーツに取り組める環境「弘前大学モデル」が構築された。

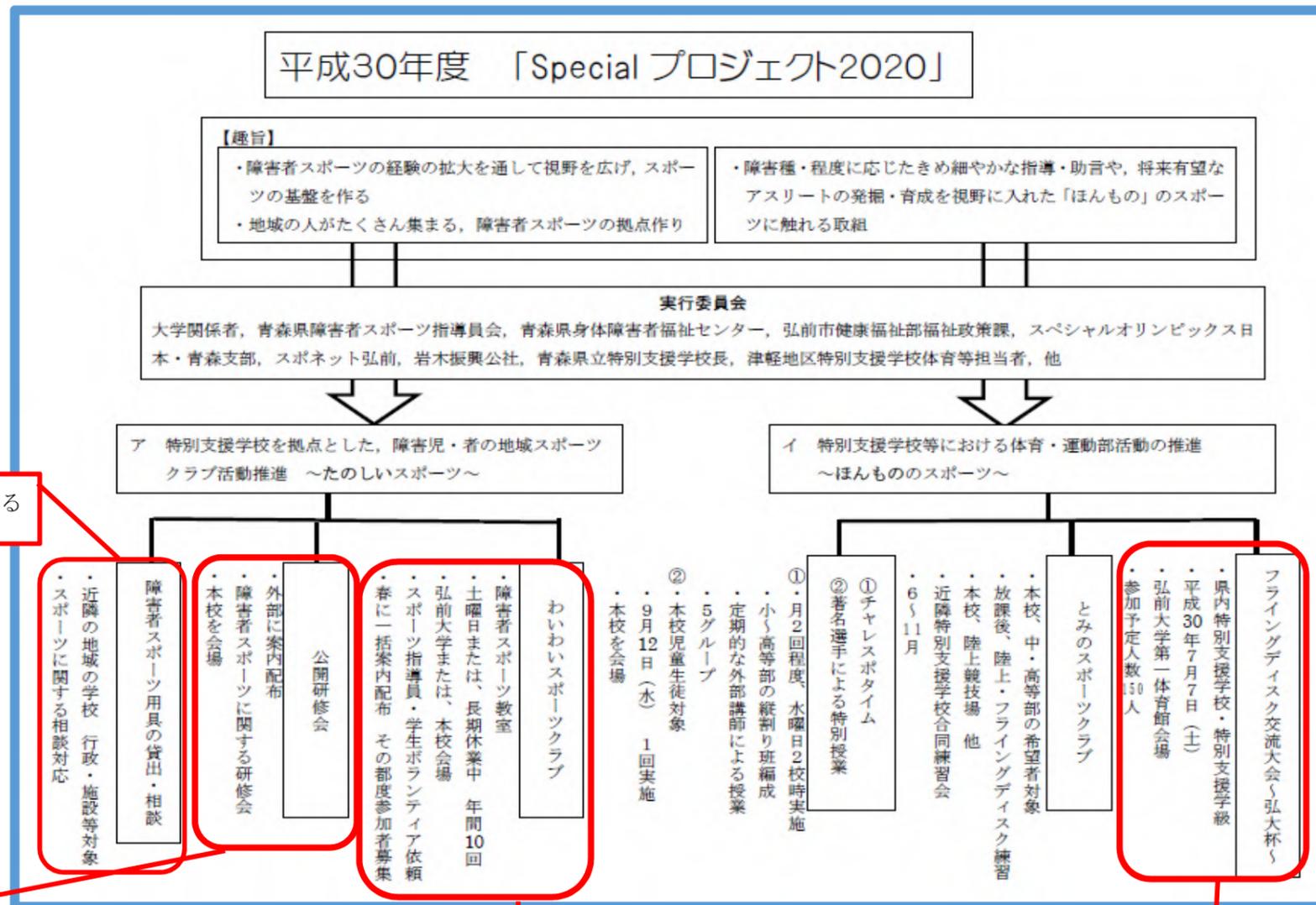
## (3) 事業課題

本事業の評価指標やアンケート結果から、更なる障害者スポーツ活動を振興していく上で次のような課題が考えられる。

まずは、色々なスポーツの経験ができる環境を維持するための、スポーツの活動拠点の定着を図ることである。そのためには、障害児者に関わる地域の関係者の更なる連携を図り、「弘前大学モデル」を定着させる必要がある。次に、障害者と健常者が共に同じ場で、同じスポーツを楽しむインクルーシブスポーツに発展させることである。そのためには、実行委員の構成の見直しや「弘前大学モデル」の周知、イベントの情報発信方法の改善等、実行委員会の機能の拡張する必要がある。また、今後アスリートの発掘・育成を視野に入れた競技スポーツに繋がる取組に発展させるためには、スポーツを楽しむ段階から、高い目標設定をするような、意欲を向上させるためのアプローチが必要である。そのため方策として、競技スポーツを通じた同年代の人との交流の場が考えられるが、(人口の少ない)地方というハンディを克服するため他県

の選手との交流の場を設定する案も考えられる。

上記の残された課題から、実行委員会の機能を改善し、更なる環境整備やスポーツ活動の推進に取り組んでいく。



地域の拠点ということで、継続して地域貢献に努める

実行委員会アンケートから、講習会や研修会の実施希望がある。地域の人が集まる場としてアットホームな講習会等を実施する。

H28年度の活動反省を受け、H29年度からスタート。  
 H29：3回実施。H30：8回実施。  
 H30～地域と連携した、生涯を通じたスポーツ活の拠点「弘大モデル」スタート。  
 参加者も増え、参加者からは、継続して欲しいという意見が多くよせられている。  
 特別支援学校での活動ということで、安心して参加できる。

H28から毎年1回、計3回実施。参加者増加傾向。  
 職員のアンケート結果→継続18名 今年度で終了2人 未提出7人  
 継続する方向で検討。

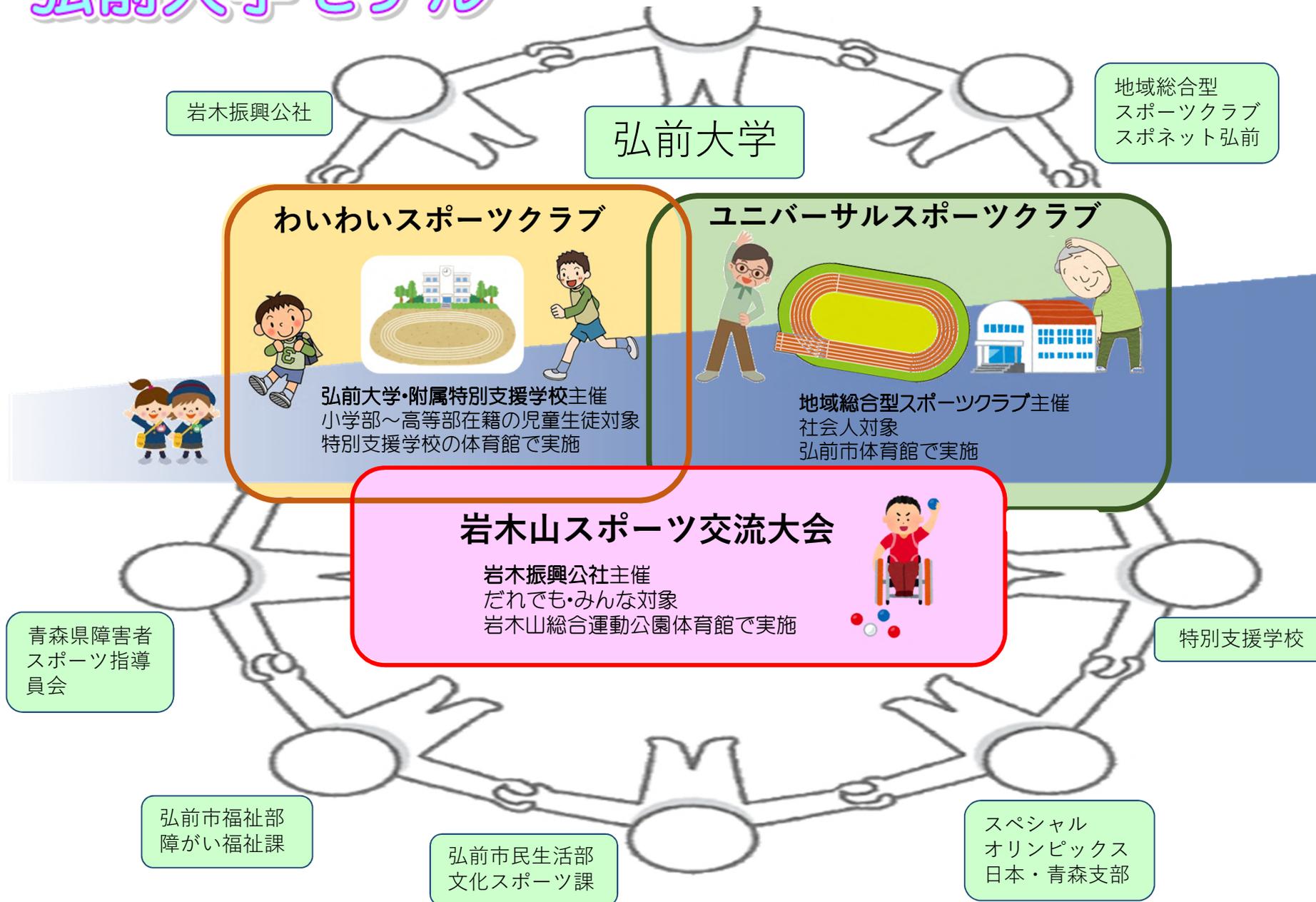
**【目的】**「たのしい」スポーツ経験の拡大を図る。  
 地域と連携した、インクルーシブスポーツを行うことで、スポーツを通して、共生社会の実現に向けた取組の拠点となる。

**【H31年度案】**◎地域の小学校への案内・周知  
 ・活動については、今年度と同様。障害者スポーツ指導員や大学職員、学生を中心とした、スポーツ教室

**【目的】**ほんもののスポーツに触れる機会を通して、目標を高く抱くことに繋げ、スポーツイベントの参加の促進を図る。

**【H31年度案】**◎電子会議システムを利用したサテライト大会運営  
 ・今年度の内容をベースに、ICT機器を使った遠隔地からの大会参加  
 ex：県内外の特別支援学校とICT機器を設置して、遠隔地からの参加。  
 同じ条件で、大会に参加する。

# 弘前大学モデル 地域と連携し、生涯を通してスポーツに取り組める環境の構築



## 平成30年度「Specialプロジェクト2020」

## 実行委員会名簿

	氏 名	所 属 ・ 職 名
1	福 沢 和 彦	青森県障害者スポーツ指導員会・会長
2	竹 内 雅 宣	青森県身体障害者福祉センター・主事
3	佐 藤 龍 太	弘前市健康福祉部福祉政策課・係長
4	吉 田 沙 織	弘前市健康福祉部福祉政策課・主事
5	境 麻 紀	弘前市市民文化スポーツ部 文化スポーツ振興課・主査
6	三 國 美 香	スペシャルオリンピックス日本・青森
7	鹿 内 葵	総合型地域スポーツクラブ スポネット弘前・理事長
8	工 藤 直 樹	岩木振興公社・業務主任
9	川 口 晃 世	青森県立弘前第二養護学校・校長
10	大 崎 光 幸	青森県立弘前聾学校・校長
11	福 田 寛	青森県立弘前第一養護学校・教諭
12	小 猿 隼 也	青森県立弘前第二養護学校・臨時講師
13	北 山 恵美子	青森県立森田養護学校・臨時講師
14	河 内 亜 衣	青森県立黒石養護学校・教諭
15	保 村 崇 有	青森県立浪岡養護学校・教諭
16	戸 塚 学	弘前大学教育学部・学部長
17	松 岡 昌 江	弘前大学教育学部・事務長
18	小笠原 裕 一	弘前大学教育学部・事務長補佐
19	増 田 貴 人	弘前大学教育学部・准教授
20	益 川 満 治	弘前大学教育学部・講師
21	本 間 正 行	弘前大学教育学部・学部長講師
22	宮 崎 秀 一	弘前大学教育学部附属特別支援学校・校長
23	木 崎 達 広	弘前大学教育学部附属特別支援学校・副校長
24	高 橋 寿	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教頭
25	木 村 亮	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
26	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭

## 弘前大学教育学部附属特別支援学校 地域連携部名簿

	氏 名	所 属 ・ 職 名
1	奈良岡 恵美子	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
2	木 村 恵利子	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
3	柏 原 理 紗	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
4	渡 邊 直 仁	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
5	木 村 亮	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭
6	勘 林 秀 平	弘前大学教育学部附属特別支援学校・講師
7	中 嶋 実 樹	弘前大学教育学部附属特別支援学校・教諭